

5

「原理・原則」発見型授業

「書写好き」に

広島県尾道市立栗原小学校 教頭

藤井浩治



小学校では、比べる・分類する・序列化する・類推する・関連づけるなどの思考力を子どもたちに活用させ、課題解決および原理・原則（きまり）を発見させる授業が展開されています。書写の時間でも、子どもたちを主体とした学びを構築し、彼らの目が輝く授業を目ざしたいと考えています。

広島県生まれ。2008年度まで広島県尾道市立土堂小学校に勤務。陰山英男校長在籍の3年間、教務主任として土堂改革に取り組み、数々の成果を上げる。光村図書 小学校・中学校「書写」教科書編集委員を務める。

1 文字の

「原理・原則」とは

(1) 先人たちの知恵の結晶

図1を見てください。これは、絵ではありません。今からおおよそ三三〇〇年前に中国（殷代）で生まれた「甲骨文」と呼ばれる文字です。さて何と読むのでしょうか。そうです。「魚」です。

この文字は、目で見てもすぐに分かるという長所はありますが、複雑すぎて形を覚えるのが大変ですね。筆順も分からないし、書くのに時間がかかりそうです。

そこで、中国の先人たちが長い年月をかけて、試行錯誤を繰り返しながら現在の漢字を完成していったのです。

まず左ページ図2のように、うるこやひれを省略し、図3のように、うるこを四角形に整えて、図4のように、現在使われている形が唐代に完成するまでに、およそ一九〇〇年もの年月が費やされています。

漢字を整えて書くための原理・原則とは、多くの先人たちが長い年月をかけて少しずつ完成していった「知恵の結晶」だといえるでしょう。

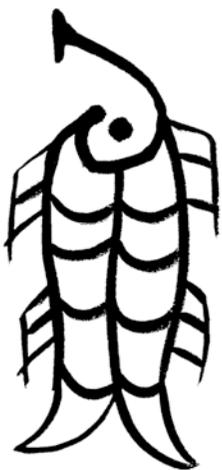


図1

(2) 原理・原則を発見する授業

書写に原理・原則があるのと同様に、他教科にもそれぞれ原理・原則（きまり）といえるものがあります。他教科では、どのような授業を行っているでしょうか。例を挙げてみましょう。

例えば、算数で三角形の面積の求め方について学習するとします。この単元の最初の学習場面で、子ども自身に考えさせることなく、指導者が初めから「三角形の面積＝底辺×高さ÷2」という公式を教えてしまうというような授業の進め方は、現在あまり一般的なではないと思います。

多くの授業では、それまでに学習してきた図形の面積の求め方を応用して考えさせているはずです。その学習過程の中で、子どもたちは自ら、「平行四辺形を二つに分けると三角形になるので、平行四辺形の面積を2で割ったらい。だから、三角形の面積の公式は、『底辺×高さ÷2』だ』などと、発見していくのです。では、書写の時間では、授業がどのように展開されているでしょう。

二年『おれ』の「ほうこう」（教科書P12・13）の授業を例に考えてみましょう。このとき、図5が示すように、「縦長四角形の漢字の『折れ』は垂直方向に、

横長四角形の漢字の『折れ』は斜め方向に書く」という原則を、指導者のほうから一方的に子どもたちに教え込んではいないでしょうか。

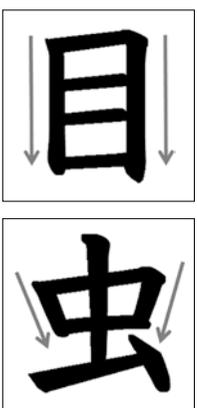


図5

『おれ』の「ほうこう」の学習では、図6のような「斜め方向の漢字カード」と「垂直方向の漢字カード」を、子どもたちとともに分類する中で、原則を発見させるという工夫をすることができそうです。このような工夫を重ねながら、教師主体の「書写の原則教え込み」の授業から脱却して、子ども主体の「発見型」授業を目ざしていきたいものです。

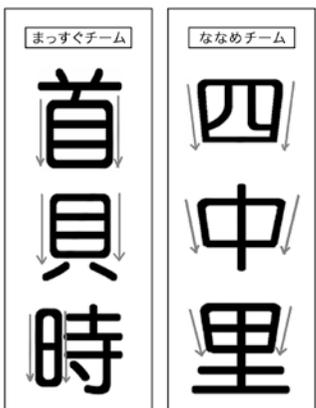


図6



図2

図3

図4

## 2 「原理・原則」 発見型授業の例

それでは、「原理・原則」発見型授業の具体例をいくつか見ていきましょう。

### (1) 左右の組み立て方

「地」という文字を使って「左右の組み立て方」の原理・原則を学習する四年「部分の組み立て方（左右）」（教科書P14・15）を例に説明します。「左右の組み立て方」の原則には、次の四点があります。

- ① 「へん」の右端をそろえる。
- ② 「へん」の縦画を右寄りに書く。
- ③ 「へん」の幅を狭くする。
- ④ 「へん」の横画を右上がりに書く。

まず、この四つの原則を踏まえ、図7のように、「土」と「つちへん」を比較して、子どもたちに「へん」の工夫を見つけさせます。一人で考えさせるばかりでなく、グループ学習をさせてもよいでしょう。その後、子どもたちが発見した「『左右の組み立て方』の原則」を板書してまとめます。子どもたちが、「つちへん」の最終画の変化（「止め」↓「払い」）を

発見した場合は、原則⑤として「最終画の変化」を加えてもよいでしょう。これが本時の「ねらい」となります。

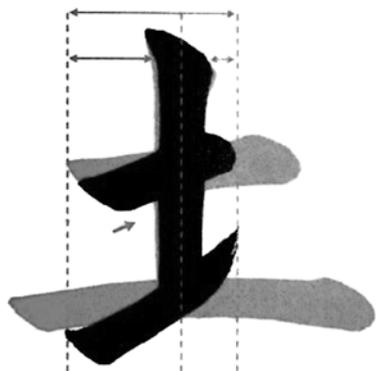


図7

次に、他の「へん」についても、「四つの『左右の組み立て方』の原則」が当てはまるかどうかを確かめます。図8のように、「ひへん」も「きへん」も、四つの原則が全て当てはまっていると考えることができます。つまり、子どもたちが見つけた原則が、「つちへん」だけでなく、他の「へん」にも当てはまるものであると確認できたこととなります。



図8

### (2) 点画のつながり（「払い」の方向）

「払い（はね）」の方向についての原則は、「次の画の始筆に向かって払い（はねる）」ことです。これを学習するのが、五年「字形を整えて書く」（教科書P6／図10）です。

この原則を子どもたちに発見させるためには、教科書にあるように、⑦「払い」が次の画の始筆に向かっていない「和」と、⑧「払い」が次の画の始筆に向かっている「和」とを比較して考えさせると

よいでしょう。そして、子どもが発見した「払い（はね）」の方向の原則」を板書してまとめます。

次に、他の文字についても「払い（はね）」の原則」が当てはまるかを確認することで、この原則が、「和」だけでなく、全ての「払い（はね）」に共通するものであることに気づくことができます。

最後に、原理について考えさせます。「どうして、『払い』や『はね』は次の画の始筆に向かっているのでしょうか」と

そして最後に、原理について考えさせます。原理とは、原則の理由に当たるものです。「どうして、『土』が『つちへん』になると、四つの工夫をしなければならぬのでしょうか」と、発問してみましょう。図9のように、「土」のカードと「也」のカードを組み合わせてみると理由が分かります。「四つの工夫」がなければ、「土」と「也」がぶつかってしまうのです。「うまく譲り合って組み立てられている」ということに、子どもたちが気づけるようにすることが重要です。



図9

発問してみましょう。例えば、「のぎへん」の一目目の「払い」が下方向に向かっていると、横画にぶつかりそうです。さらに、次の画に向かって書いたほうが、流れるように速く書くことができそうです。これらの理由から、「払い（はね）」の方向が決まっているのだと考えることができるでしょう。

## 3 おわりに

今回は、書写の原理・原則を、指導者による教え込みでなく、子ども主体の発見型の授業に転換していく授業のあり方について提案しました。

こうした授業では、子どもたちに原則を発見させる前に、「試し書き」をさせておくより効果的です。「試し書き」には、学習前の個々の課題が表れており、これを残しておくことで、それまでの自分がいかに原則を意識せずに文字を書いていたかを再認識することができるからです。

子どもたちが意欲的に参加し、自ら考えながら学習できる書写授業をとまにつくっていきましょう。

① 字形を整えて書く

ほ先の動きと点画のつながり 1

字形が整って見えるのは、どちらだろうか。理由も合わせて考えよう。

▼えんびつて、ほ先の動き（——線）をなぞり、点画のつながりを確かめよう。

ほ先の動きと点画のつながり

★ほ先を、次の画の始筆に「つなく気持ちで書く」、終筆の方向が定まり、字形が整う。

図10